



第2号

平成26年
7月1日発行

人麻呂が詠んだ 歌を朗唱

江津市ゆかりの万葉歌人・柿本人麻呂の銅像が建つ、同市島の



人麻呂ごうつ祭りで見聞歌を朗唱する小学生

星町の高角山公園でこのほど、第7回人麻呂ごうつ祭りがあり、訪れた約300人が、人麻呂が詠んだ歌の朗唱などさまざまな催しを楽しんだ。市や関係団体で組織する実行委員会が主催した。

公園内にある人麻呂と石見の国の妻・依羅娘(よさみのおとめ)の銅像周辺で、高角小学校(江津市嘉久志町)の1〜3年生約60人が、人麻呂が詠んだ「石見相聞歌」などを朗唱。同市の人麻呂顕彰グループ・麻呂の会の黒川貢会長と山陰万葉を歩く会の川島美美子会長が、人麻呂と依羅娘子風の衣装を着て登場し、祭りを盛り上げた。

このほか、子どもたちによるダンスや石見神楽も披露され、来場者が盛んに拍手を送っていた。



石見神楽「高角山」の上演

上記の記事のイベントが五月十八日に行われた。

国司として赴任したという柿本人麻呂と角の里の依羅娘(江津市では恵良媛さんと呼ばれる)とのすばらしい恋の歌「石見相聞歌」を中心とした内容だった。

小学生の朗詠をはじめとして女声合唱団(コールカトリア)による相聞歌の合唱があり、書道家の植田睦水氏による、「相聞歌」を即興で、素晴らしい書として皆様にご披露されるなど、万葉の恋歌を様々な趣で楽しむことができた。

最後に、柿本人麻呂をテーマに創作された神楽「高角山」が、石見神楽波子社中により演じられ、あらためて、「石見相聞歌」が、今でも多くの人達に愛され

ていることを感じる事ができた。

屋台では、万葉のたべものとしての猪鍋や古代米のおにぎり、天ぷら、などがあつた。前日の十七日には、江津万葉巡りも開催され、白波寄せる石見の海・韓の崎・恵良の里を身近に確かめた。(編集子)

「奈良時代の都 と伯耆国」



講演会の風景

(倉吉博物館四十周年記念講演会と、特別展「大伯耆展」らしといのり」に参加して)

五月二十四日、田辺征夫先生(奈良県立大学特任教授)による講演を聞いた。奈良の都では国の体制づくりがどう行われたか、それによって伯耆の国では様々な変化がおこったことなどを、最近の発掘調査などをとに話された。

中央では、国・郡などの区域を決め、道路網を整備し、税や兵などのきまりを定めた。地方では、国や郡の役所を設置し、税を集めて奈良に運び、火急の時に備え、兵を置いた。

伯耆の国についてそれらを考えてみると、上国とされ六郡四十八郷が含まれ、山陰道が日本海側に造られ、十六キロ毎に駅があり、役人用に馬五頭が置かれた。

伯耆国庁は昭和四十五年から発掘が始まり、八世紀後半から十世紀前半までの建て替えが確認されている。この頃奈良の都では約十万人程度居住したのではないかと推測された。伯耆の国ではこの頃、何万人の人がいたのだろうか。

万葉歌人の山上憶良は、伯耆国国司として七十六年に任命されているので、倉吉市の不入岡遺跡が当時の役所ではなかったかと推定された。「貧窮問答歌」がどこで詠まれたかは定かではないが、伯耆の国でも憶良は人々の暮らしにやさしい視線を送っている。(編集子)



安来の人麻呂伝説を訪ねて

(安来市立図書館 初代館長 佐々木 弘氏)



人麻呂神社御神像

一. はじめに

昨年十二月二十二日、安来の和鋼博物館で『風土記を訪ねる会』による「賀茂の神戸を語る会」が開かれた。

講演の中で、関和彦先生から「安来市には、柿本人麻呂の伝説がある」との説が披露された。その夜の懇親会で、関先生・川島先生そして会場となった「酒房・やまきち」の山本節子さんたちの間で、安来に伝えられている人麻呂伝承を調べれば面白いということが探訪の発端となった。

以来、関・川島両先生と安来では山本節子さんと古志野与四

郎夫妻（戦時中まで人麻呂ゆかりの地の仏島付近に旧宅があった）と、私の六人で人麻呂探訪が始まった。

二. 安来の人麻呂伝承

柿本人麻呂は、七世紀後半の歌人で『万葉集』の代表的歌人として歌聖とも言われる人である。しかし生年や経歴が不明であり、終焉の地も石見の国・鴨島や鴨山などが言われている。

一方、安来市でも人麻呂終焉の地という伝承があり、次のような文書・石碑・御神像などが残されている。

(1)「雲陽誌」二一七七年(享保二)「佛島 磯より一町ばかり沖に巨石あり、往來の旅船此岩にのりかけて多く破船す 故に石を立て文字を彫る それより世俗佛島といふ」

(2)「安来港誌」一九一五年(大正四)

①徳心寺の五輪の塔

「朝臣の墓碑と伝えられ、その山号を聖林山と称するのは、朝臣の死を悼める各地の歌人等が

ここに集まって追弔の席を催したことによると伝えられている。」

②乗相院の人麻呂木像

「乗相院には、朝臣の古木像が恭しく保存されている。」

(3)「安来市誌」一九七〇年(昭和四十五)

「安来の現在の潮見町地内に昔から仏島という島があった。出雲国風土記には、加茂島(亀島)の次に子島と誌してある小島で、人麻呂が都から石見国へ往來の途中、船便で通られた時、暴風に遭遇して、難航し、人麻呂は老齢のため惜しいことに客死されたもので、郷人、徳を慕って、島の上に石碑を建てて『仏島』と称した。

墳墓は、加茂島・愛宕山「古名加茂島」・亀島「古名鴨島」などある。

仏島の石碑は、現在日立安来工場が掘り上げて、工場裏山の金屋子神社の側に移祭しているが『メートル五〇』古書には表面に「勢至観音(梵字)が彫つてあると言っている。

旧細井村の山陰線の南部を沢田といい、寺屋敷跡中腹に古墳があり、称して「大納言山」と呼ぶ。細井の古老の話で、昔偉い人が亡くなってここに葬った

そうである。もちろん、安来市において「大納言山」なる地名・山名は珍しい。

夜見島・弓ヶ浜は出雲国風土記時代、島が点在していて、人麻呂公の因幡へ出雲へ石見の船旅もあるいは利用されていたという想像はあり得るわけで、各地に終焉地を唱えられている現在、微証ではあるが安来にも終焉の伝説地があることの一資料として掲げた次第である。

以上のようの事柄を踏まえ、三回に分け安来市の関係地を訪ね歩いた。

その結果、仏島の石碑は日立金属安来工場により移設・保存されていた。御神像も乗相院とは別の場所で保管されていたことが確認できた。しかし、徳心寺の五輪塔は消滅していた。残っているものが人麻呂伝説と、どのように結びつくのか現時点では確たるものがない。これからも安来における伝承の断片を収集していけば、安来と人麻呂との関わりが明らかになるのではと思う。

三. 現地探訪
(1)三月二日
仏島跡を訪ね「日立金属海岸工場」に向かう。工場の道路沿いに六地藏が祭られていた。

ここに仏島と周辺の家々の墓地在ったという。しかし、石碑は山手工場内に移設。六地藏だけが残されたということである。

次に人麻呂の墓石が(仏島の近くにあり、たいてい仏といわれるもの)「松源寺」に移設されているということで寺を訪ねる。



仏島跡の六地藏

駐車場の山際に、高さ一・二メートル程のずんぐりとした自然石が建つ。文字などの痕跡がなく墓碑と判断しかねるものであった。なお、傍らに個人作成の説明板がありそこには仏島から移設したもので柿本人麻呂の墓ではと紹介されていた。

隣接地の「乗相院」に向かう。ここは人麻呂の御神像を安置していた安来で最も古い寺である。

住職は、市内の別の寺に住まいされており後日御神像を見送ることとした。



「徳心寺」を訪ねる。人麻呂の墓碑と伝えられる五輪塔があつた寺である。住職は、偶然にも川島先生と旧知の方で庫裡にてお話を伺う。しかし、五輪塔は消滅し住職も古い話で記憶も定かでなかつた。

雨の中を歩きながら、歳月と共に物や記憶が風化していくのだという思いがした。

(2)四月二十日(日)

人麻呂の御神像を特別に拝見した。

御神像は三〇センチほどの大きさで、絵で見るようにあぐらをかき、頭に烏帽子を被り、細面の顔に顎にひげを蓄え顔にしろのある品の好い像であつた。

胴に首をはめ込むように作られ、手に筆か短冊など持つていたかのようであつたが失われていた。さらに、何か所か補修の跡が残されていた。

帰る途中、東切川の「川根神社」に立ち寄る。関先生は、安来に人麻呂伝承があるのは『吉田芳章』という歌人が、安来に和歌を広め、その活動の中から歌聖と仰がれた人麻呂を尊び、石碑や木像が創られたのではと推察されていた。

川根神社は、吉田芳章が文政年間(一八二〇年頃)に京都から

ら安来に招かれ、この神社の住職として住まいしていた所という。

畑の山際に、墓石が数基立っていた。中に、吉田芳章と読める墓石を確認できた。

「日立金属山手工場」に行く。

山本節子さんの尽力と山根課長の配慮で、めつたに見られない仏島にあつた石碑を見ることができた。

金屋子神社・利器稲荷・秋葉神社と並び一番左に人麻呂神社が鎮座していた。神社の高さは三メートルほどで、その隣に仏島の碑が建つていた。

高さ一・五メートル、幅五〇センチほどの石碑で先端の一部が欠けている。波で洗われたような石で、碑面の上部に文字らしきものが見えるが、判読はできなかつた。

説明板によると仏島の碑は昭和十六年に移設され、日立金属により神社も建てられ、毎年大切に祀りをされている。

後日、昭和四十五年編纂の安来市誌に人麻呂伝説を見つけ、その中に「石碑の製作年代は室町、壁面に大日如来と阿弥陀如来の種子を入れる」と記されていた。この日は、人麻呂の御神像、吉田芳章の墓、仏島の石碑

を確認することができ収穫の多い日であつた。

安来の人々の心に柿本人麻呂を敬愛し大切にしようという姿勢を知ることができたことは何よりの喜びでした。

いそたけ 五十猛町大浦 の「人丸社」 について

(五十猛歴史研究会会員

三井 淳氏)



人丸社を偲ぶ小学生

五月十日、旧土肥屋邸宅(大田市五十猛郵便局長林康二氏宅)で「大浦座」が催された。これは、歴史好きの人々が集い、あれこれ語り合う茶会のようなもので、帰りたい時はいつ帰ってもよく、林家の事情の許す限り、長居しても構わない。今回は林家蔵の古文書を整理す

る機会に当たったが、思わぬ逸品に巡り合うことができた。木箱の底から「可良浦人丸社記」なるものが出て来たのである。

可良浦は韓浦で、大浦の古名である。大浦の海へ突き出した最先端部を「大崎ヶ鼻」というが、古くは「辛の崎」と呼ばれていた。余りにも有名な柿本人麻呂の万葉歌、「つのさはふ 石見の海の言さへく 辛の崎なる……」の辛の崎とは、この大浦の岬なのだという想いは、昔から地元民に根強い。昭和五十二年、「水底の歌」の著作である梅原猛先生が当地を訪れ、「人麿の 悲しみ残る五十猛の 辛の崎を ここと定めんか」という歌を詠まれて、この五十猛町大浦こそが、人麻呂歌の舞台であつた可能性を示唆された。

「可良浦人丸社記」は、明治十年に書かれたもので、そう古いものではないが、今の所これが最古の人丸社に関する史料となる。巻頭に人丸御神像の写真が添付されているが、明らかに昭和になって付け足されたものである。像の大きさは五寸五分、頼阿法師の作とある。頼阿法師は十四世紀に実在した有名な歌人で、自らの手で人丸の御神像

三百余体を彫り上げたという。写真の次頁に御神像の銘が抜粋され、「頼阿法師之刻」とある。残念ながら、人丸御神像の現物は遺つていない。昭和四十年頃までは、林家で保管されていたようである。

巻末に佐々木信綱の、「柿本人丸鎮坐の御像を拝みて 石見なる林家のために」と題する、「歌の聖 いましし國に かしこみも あうきまつらん ひしりの御像」という歌が載っている。高名の国文学者にして詩人の目には、頼阿の真作と映えたに違いない。

「可良浦人丸社記」、「五十猛歴史年表」(長尾柳作者)、犬養万葉記念館(奈良県)の富田敏子先生の調査などによると、辛の崎人丸社は、寛文九年(一六六九) 正定寺(辛の崎の寺) 四代の台誉上人が、京都から人丸御神像を供奉したのに始まるというが、その後暴風のために大破し、林家庭中の「龜山(築山)」に遷され、祭祀は正時代まで続いたという。

五月一六日、五十猛小学校の六年生が辛の崎へ上がり、みなで人丸社の在りし日を偲んだ。彼らの内から、人丸研究家の育てられんことを祈ろう。



川越市の 人麻呂さん

(川島 芙美子)

※前頁の「安来の人麻呂伝説を訪ねて」と「大田市五十猛町大浦の「人丸社」について」をお読みいただいてから、この「川越市の人麻呂さん」をお読み下さい。

昨年九月にこの「山陰万葉を歩く会」が始まり、一月十三日に江津市で「万葉フェスティバル」が行われ、約三百五十名の方々が来られました。

その頃から、大田市や安来市で、人麻呂さんのことが急に再発見されるようになり、思いがけない情報が、次々と入るようになり、あらためて、柿本人麻呂の背景の大きさ、万葉集のもつ奥深さに驚きました。山陰万葉の、再発見・新発見は今後も出てきそうです。

「安来市の仏島には人麻呂神社があり、人麻呂さんのお墓があった。」「乗相院(安来市最古の寺院とされる)には人麻呂御神像が祀られていた。」などのことを確かめるべく、安来の方々が動いて下さいました。その結果の一つとして、人麻呂御

神像を間近に拝顔することができ、そのすばらしさに息をのむ程でした。

大田市では、五十猛町中心に、人麻呂神社の調査と確定が行われていましたが、さらに、古文書が出てきて、解読が行われ、人麻呂さんについて様々なことが判明しました。「可良浦人丸社記」によると、「柿本朝臣之尊像」があつて、それは頓阿法師の作と記されていきました。

また別の情報によると、川越市(埼玉県)にも柿本人麻呂神像が存在し、やはり頓阿法師作とされていきました。この二つの御神像は、大きさといい、お姿といい、よく似ているように思えます。偶然の一致でしょうか。

まだ、安来の人麻呂御神像は、誰の作かもわかっておりません。が、これらの情報の背景には、人麻呂信仰に対する大きさをうかがわれます。全国的にも、確かに大きく広がっていることは、既存の事実なのですが、歴史的にもその背景には、とても大きなものが考えられます。

山陰万葉を歩く会では、柿本人麻呂の背景の大きさ、万葉集のもつ奥深さを知るべく、八月五日(火)、六日(水)、大和を歩きます。ぜひご参加下さい。

平成二十六年年度

本活動の参考になる行事等

- (1)七月二十一日(月・祝)
交流事業第一弾(島根大学教養講義室棟2号館702教室)
(午前の部 10:10)
講演「柿本人麻呂の魅力」
—石見と大和を中心に—
発表①北陸の万葉の魅力
②風土記と万葉の魅力
(午後の部 13:30) 見学会
「風土記と万葉とゆかりの地を巡る」—松江市南郊中心に—
- (2)八月五日(火)、六日(水)
交流事業第二弾 万葉旅行
—人麻呂さんを訪ねる旅—
—奈良市・天理市を中心に—
講師 坂本信幸先生(高岡市万葉歴史館館長・奈良女子大学名誉教授)
- (3)今秋
因幡万葉歴史館二〇周年事業
- (4)今秋
歌を中心とした全国交流事業
(益田市)
- (5)平成二十七年二月十五日(日)
「ヒト・マル」創作オペラ上演
石見芸術劇場(グラントウ)

「山陰万葉を歩く会」 ご入会のご案内

■「山陰万葉を歩く会」の概要

- 会長 川島 芙美子(風土記を訪ねる会代表)
- 副会長 木谷 清人(鳥取市公益文化財団理事長)
- アドバイザー
藤岡 大拙(荒神谷博物館館長)
内田 賢徳(萬葉学会代表)
末成 弘明(いわみ芸術劇場館長)
- 年会費 個人2千円、団体1万円

■会費の振込先

- ①ゆうちょ銀行 一三九店 当座 0052297
山陰万葉を歩く会
- ※ゆうちょ銀行口座からの振込は、
口座記号番号 01340・4・25597
- ※会報に同封の振込用紙を使うと手数料無料

- ②山陰合同銀行 江津支店 普通 3659557
山陰万葉を歩く会 会長 川島芙美子

■申し込み・問い合わせ先(事務局)

江津市役所 商工観光課 観光振興係
電話 0855・52・2501
FAX 0855・52・1379
メール shokokanko@city.gotsu.lg.jp

